

平成 23 年度 府立視覚支援学校 評価報告書

1 めざす学校像

大阪府立で唯一の視覚障がい支援学校であるという自覚のもと、培ってきた視覚障がいの専門性を維持・継承し、専門教育を実践する。全国の視覚障がい教育のリーダーとしての責任を果たす。

1. 幼児・児童・生徒の一人ひとりを大切にされた専門性の高い学校
2. 府内における視覚障がい教育のセンター的機能を果たす学校
3. 教職員が教育者としての高いプロ意識をもった学校

2 学校教育自己診断における結果と分析・学校協議会における提言内容

学校教育自己診断の結果と分析 [平成23年10月 実施分]	学校協議会における提言内容
<p>○対象及び回収率 (H23/H22) 「児童(小)・生徒(中)(高)・学生(専)」(64%/70%)、 「保護者・保証人」(74%/65%)、「教職員」(72%/72%)</p> <p>○質問のカテゴリー 昨年度と異なるもの(学校行事、学校安全、人権教育、生徒指導)と昨年度と同じもの(進路、授業)</p> <p>※ 昨年度と比較して「児童・生徒・学生」及び「保護者・保証人」の回収率が上がったが、昨年度の反省に基づき質問数を精選し、教育懇談会での保護者の意見を踏まえた質問としたことなどが理由と考えられる。</p> <p>○主な結果と分析</p> <p>※ 学校行事: 小中高では生徒・保護者とも満足度は高い(約90%)が、行事のない専修部では否定的評価が見られる。自治会を通して学生の意見を集約したい。</p> <p>※ 学校安全: 校内の危険箇所や不具合に対する否定的評価が2割から4割強ある。建て替えを控えているが、安全安心の確保のため、できる範囲で対応したい。</p> <p>※ 人権教育: 学生の人権に配慮しているかという質問に、学生の2割強が不満を持っている。この結果を真摯に受け止め、すぐに学生から事情聴取を行うとともに教職員研修を行い改善に取り組んだ。</p> <p>※ 生徒指導: 生徒指導における学校と家庭の連携について、保護者の肯定的評価は多い(約90%)が、教職員はまだ不十分と感じている。方法等について検討したい。</p> <p>※ 進路: 進路情報の発信について、15%から30%肯定的評価が増えている。改善の余地はまだあるので、さらに発信に努めていきたい。</p> <p>※ 授業: 授業の工夫やわかりやすさについて、専の学生の3割弱、中・専の保護者の2割弱が否定的評価である。教職員の研修などを充実させ、スキルアップを図りたい。</p>	<p>第1回 (7/7)</p> <p>○ 学校の危機管理体制について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 海拔などの本校の立地条件を把握し、津波の被害などを予想などして、対策を検討すべきではないか。 ・ 地域では、町会を中心に年数回避難訓練を行っている。本校は、地域の避難所に指定されているが、実際に宿泊者を受け入れる訓練なども実施するといいのではないか。 ・ 建替え予定の新校舎に、備蓄物資の保管スペースを確保してほしい。 ・ 「震度5以上であれば休校」というように一定ルールを定めておけば、緊急連絡が簡素化できるのではないか。 <p>○ 新校舎建設の進行状況について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 工事に入る前に地元への説明会を行い、近隣からの工事に対するクレームにきちんと対応することが必要である。 <p>第2回 (10/22、10/29)</p> <p>○ 行事(生活発表会・学習発表会・文化祭)を見学して</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ さまざまな幼児・児童・生徒の様子を一か所でじっくりと時間をかけて見ることで、学校の状況が理解でき今後の提言がしやすくなった。 ・ 子どもたちの発表がたいへん素晴らしかった。先生方の日頃の指導の成果だと思う。 ・ 専修部の学生も参加すれば良いのではと思う。 <p>第3回 (3/2)</p> <p>○ 学校教育自己診断結果について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教員の回収率を上げてほしい。 ・ 複数の生徒の意見を複数の教員が聞くという取り組みを組織的・継続的にできないか。 ・ 生徒への指導のあり方について、対応が必要である。 <p>○ 学校評価報告書及び学校経営計画について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 支援学校教員免許の取得率向上に努力してほしい。 ・ 重複障がいの児童・生徒への指導には、保護者との連携を大切にしてほしい。 <p>○ 学校の危機管理体制について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 近隣の福祉団体やNPO団体と連携を取っておくと支援を受やすいのではないか。 ・ 医療機関との連携も必要ではないか。

3 本年度の取組内容及び自己評価

	本年度の重点目標	具体的な取組内容	取組内容の自己評価
取組み①	個別指導の充実	<p>①重度重複の幼児・児童・生徒への教育の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> 校舎建替えと教育課程の再編をセットに取り組んでいる。教育課程の見直しも第4次の段階に来ている。教頭、首席、各部の教務代表からなる委員会で、構想を教育課程に落とし込む作業まで実施した。 重複障がい教育研究会において、各学部で使用する教材や教具及び授業の進め方を交流し、検討した。 特別な配慮を要する幼児・児童・生徒の対応する委員会を立ち上げ、医療との連携を必要とする児童生徒の対応について整理をした。 自立活動研究会においてADLチェックリストを作成した。 <p>②進路指導の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> 一人ひとりの生徒の進路に応じた職場実習先を開拓し参加した。特に重複の生徒の進路開拓には重点を置き、それぞれの進路実現をした。 保護者に「進路指導の概要」文書を配付した。 進路学習会、進路ガイダンスを学部・科別に実施した。 <p>③平和寮との連携強化</p> <ul style="list-style-type: none"> 保健では、日々の健康観察はもちろんインフルエンザなども連絡を密にとり、適切に対応した。 学校行事などの連絡は窓口を決めて、その都度確認をした。 進路ではケース会議をもった。 新転任は全員、平和寮で研修をした。 	<p>①重度重複の児童・生徒への教育の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> 教育課程の検討は、教頭、教務部長を中心に検討をしている。平成24年度には、より具体的に見える形にして全教職員で共通理解することが課題になる。 本校の課題が、重度・重複化にあることをいっそう共通理解することが必要である。ADLチェックリストは、より使いやすいものになるよう検討・改善する。 <p>②進路指導の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> 本校の進路指導は、広域と一人ひとりの障がい状況が多様な中、進路実現は評価する。 夏季休業中に2件の職場体験、5件の体験通所が実施できた。 中学部の進路指導に対して意識付けができた。保護者対象の作業所見学も実施できた。 学校教育自己診断において進路情報の発信について、15%から30%と肯定的評価が増えたことは、改善が進んだと評価する。 進路の手引きの改訂はしなかった。 <p>③平和寮との連携強化</p> <ul style="list-style-type: none"> 連絡を密にすることで、担当者間の相互理解が深まった。特に、感染症の流行時に見通しを持って指導できた。ケース会議を開いた。
取組み②	障がい理解と地域貢献	<p>①音楽活動の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> 校内外での音楽活動（演奏会、コンクール、CD作成など）を積極的に行った。地域住民対象のジョイフルコンサート(12月)、大型商業施設でのハートアイコンサート(年数回)などに加え、招待演奏も増えた。教職員と生徒が一体となった49名の合唱団を結成し、コンサートでの演奏や大阪マラソンの応援を行った。 <p>②地域支援の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> 専修部のあん摩・指圧・マッサージの臨床実習による地域支援の充実を図った。校内の臨床室だけでなく、校外の福祉施設などでも行った。 <p>③センター的機能の発揮</p> <ul style="list-style-type: none"> 教育支援室に新しいスタッフを加え、巡回教育相談、教育相談、理解啓発活動を行った。 	<p>①音楽活動の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> 音楽活動を積極的に行うことで、音楽科を中心とする生徒の演奏の活動の場が確保でき技量も伸びた。ヘレンケラー賞をはじめ多数入賞した。 音楽活動を通じて地域貢献や理解啓発の推進もできた。このような活動が評価され、「がんばった学校支援事業」の支援校に選ばれた。 合唱団を結成することで教職員の中に学部を超えた一体感も醸成できた。 <p>②地域支援の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> 臨床実習は学生の技量を高めると共に、地域の方の本校への理解を高めた。 <p>③センター的機能の発揮</p> <ul style="list-style-type: none"> 例年同様の活動を行った。新しいスタッフの養成とメンバーの資質向上が継続する課題である。 高等学校への支援がほとんどなかった。進路選択枝の一つとして専修部の情報提供を図りたい。

<p>取組み③</p>	<p>専門性の維持・継承</p>	<p>①歩行訓練士養成事業</p> <ul style="list-style-type: none"> 日本ライトハウスの「視覚障害生活訓練等指導者養成課程」(歩行訓練士研修)へ教員1名を半年間派遣した。 <p>②点字講習会の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> 点字の力量を高める(中級程度)ため、時間を確保して週1回点字講習会を実施した。 <p>③教科指導の専門性向上</p> <ul style="list-style-type: none"> 教科指導(特に、国語・英語・数学・理科)における専門性を向上させるため、毎月教科別研究会を開催し、公開授業を行った。 OJTで専門性を継続するよう人事配置をした。 研究会報告冊子を作成し、全教員に配付し情報を共有した。 	<p>①歩行訓練士養成事業</p> <ul style="list-style-type: none"> 教員1名が上半期の日本ライトハウスでの研修を終え、下半期に本校での実習を行った。また、成果を他の教員に伝え教職員に専門性について再認識させた。 平成24年度も継続して1名派遣する。歩行訓練士の養成事業は定着できた。 <p>②点字講習会の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> 点字講習会には10名が参加した。実践的な課題を行うことで、専門性が向上した。 教員1名が点字技能士試験に合格した。 平成24年度も継続する。2つのグループに分けて、参加者を増加させて実施する。 <p>③教科指導の専門性の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> 教科別研究会が主体となって公開授業を行い、意見交流会で研究を深めた。 OJTで新転任教員へ専門性を継承することができた。新転任教員のさらなる資質向上が課題になる。
<p>取組み④</p>	<p>100周年記念事業</p>	<p>①100周年記念事業</p> <ul style="list-style-type: none"> 100周年記念事業準備委員会を立ち上げ、実行委員会・専門委員会の規約、構成員、記念事業案について検討した。 メインテーマを決定し、テーマソングや記念横断幕を作成した。 記録・保存作業(画像・映像)を行った。 他校の周年行事に教員を派遣した。 <p>②歴史的資料の整理</p> <ul style="list-style-type: none"> 歴史的資料を整理し、歴史的資料の一部を玄関に設置したケースで展示した。 整理に着手するとともに、文化財保護課の指導を受けた。 <p>③建替え工事</p> <ul style="list-style-type: none"> 建替え工事計画は、地元住民の理解を得られずに大幅にずれることになった。地元住民の工事への理解を図るために、直接に説明しにいった。 教職員に対しては、随時、工事の進捗状況の情報提供に努めた。 	<p>①100周年記念事業</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成23年度の準備委員会の役割はほぼ果たした。 平成24年度は、規約、構成員に基づき実行委員会・専門委員会を次年度立ち上げ、具体的に記念事業の準備に着手する。 メインテーマ・テーマソング・記念横断幕により、教職員が100周年を意識するようになった。 他校の周年行事の取組をみることにより、担当教員に周年行事の準備を再認識させることができた。 <p>②歴史的資料の整理</p> <ul style="list-style-type: none"> 玄関の展示は、校内の教職員の100周年記念事業の意識付けに効果があった。 本校の訪問者に対して、本校の歴史と盲教育の歴史の一端を伝えることができた。 <p>③建替え工事</p> <ul style="list-style-type: none"> 工事は大幅に遅れることにはなったが、地域に本校の教育を理解してもらおうことの難しさを再認識した。 100周年記念事業と新校舎の竣工を重ねる計画の見直しが必要になった。